
I S インフィニット・ストラトス ~ 芯と流情 ~

世知辛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ～芯と流情～

【Nコード】

N9033S

【作者名】

世知辛

【あらすじ】

作者のイメージが最優先となっており、それに伴って原作からそこそこズレております。

ちよいちよいネタが混じります。

上記二点が苦手な方は、お戻りください

女性にしか反応しない究極の兵器、IS>インフィニット・ストラ

トス。しかし、とある2人の男子がその常識を覆した

『織斑一夏』

『尾和浩一』

『第3世代ISの普及開始』

『第4世代ISの誕生』

時代は一気に変わ

一夏「なんでみんな怒ってるんだ…？」

浩一「俺はとぼっちりを食らう前に逃げ…」

る。かも。

ぶっちゃけ処女作です。しかも不定期更新臭、何十番煎じ？知らない。

生徒会ルートという名の視点変更は役にたつのだろうか、いやない

(反語)

しかし、更識家が目立たない今こそ…！

お付き合いいただければ幸いです。

始まりはいきなり

（二週間前）

「おめでとう、浩一くん。ついに君のお仲間が見つかったね」

空中投影ディスプレイを睨んでいたチーフが、突然にやけ顔でこちらを向いてきた。先月からニューズで大々的に取り上げられている『世界初の男性のIS操縦者』のことを言っているのだろう。時系列と外見だけ見ればそのキャッチコピーは俺のものだったかもしれない。

「……そりゃどうも」

正直な話、俺も興味津々だ。本当に”純粹な男性”が動かしたのであれば話もしたいし、出来ればこっちの研究に付き合わせたい。しかし、チーフの研究が難航している今、会う機会なんておそらく永遠に無いだろう。だからこそ忘れたくて、返事が適当になる。

ISの基礎理論と実証機を開発した稀代の天才、篠ノ之束。彼女が失踪したちょうどその年に中学に入学した俺は、入学式の夜にチーフの就職祝いを兼ねた2人きりのパーティーで、彼女が自慢気を持ってきたISを動かした。いや、今となっては”彼女が動かしてくれた”という方が語弊が無いとチーフに釘を刺された気がする。詳しい話は…機会があればしようかな。

それから3年…俺はチーフの研究に協力し、チーフは俺に衣食住と身柄の安全を提供する。こんな関係が成立し、俺は彼女からは離れ

られない。離れる動機も意志も特にないんだけどね。

「素っ気ないねえ」。あ、四肢の装甲以外はいったん閉じてくれる？」

「…すみません」

言われた通り、四肢の装甲以外をコアに戻そうとする。しかし、なにやら怪しい端末から伸びたケーブルと接続している背部バインダ―兼スラスタ―は、いつまでたっても展開されっぱなしだ

「うーん…やっぱり位相系だと…ブツブツ…」

独り言をつぶやきながら調整を再開したチーフ。こういう会話に加わって助けることが出来たら最高なのだが、学校で教わる知識では到底わからないし、入学費用などを考えたら言い出すべきことではない。

「あ、本題を忘れてた。浩一、あんた

そんなわけで、彼女の指示は

「IS学園に入学させたから」

あまりにも、唐突で

「……………は？」

暴力との遭遇

（現在）

「……………は？」

どうして声に出してしまったのだろうか。突然上げられた俺の声に、一番近くにいた女性がビクツ、と震える。しまった……。あー、確か今は自己紹介の順番待ちだったっけ？んで現実逃避したくて昔を思い出して、それから……。黙って思い返していると、先ほど震えていた女性がおそろおそろといった様子で口を開いた

「え、えっと……」

今にも泣きそうな目でこちらを見たのは、俺たちのクラスの副担任である山田真耶先生。その身長の高さに加えて微妙にずれている黒縁の眼鏡、加えて彼女の着ている服は黄色。なんとなく子供っぽさを感じさせるセンスとサイズがあっけないことが重なり、相手が年上だというのが正直信じがたいというのが第一印象である。

「あ、その、ボーっとしてて……………すいません」

「い、いえ！大丈夫です、大丈夫ですから！」

とりあえずフォローすると、すぐに笑顔に戻った。忙しい人だ…な

どど思っているうちに、彼女はもう一度”彼”に向き直る

「そ、それじゃあ織斑くん、自己紹介をお願いしていいかな？」

「は、はいっ！」

そういつつ立ち上がった彼、織斑一夏は、そのまま後ろを振り返り

「えー…えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

自己紹介をした。あれ？終わり？

なんだか周囲の空気が変わっていく。首だけを後ろに向けると、そこには異性の視線、視線、視線。

1年1組、視界の外からのもの及び山田先生のものを含め、述べ27名。みんながみんな、『MOTTO! MOTTO!』的な雰囲気
気で織斑の次の言葉に期待している。

これはキツいだろうなあ…なんて他人ごとのように考えている余裕は、彼の続けて発した言葉で即座に失われた。

「以上です」

あまりにもざっくりと切り上げる織斑、ずっとこける数名の女子。視

界の右端にいた人なんて頭には手を置いて露骨にため息をついていた。え、ちよつとまで。まだなにを言えばいいか全然決まっていなくてすけど。

「あ、あのー……え、えつと、その……じゃ、じゃあ、次は尾和くん、自己紹介をお願いできるかな？」

山田先生の声聞いて正面に向き直ると、既に目尻に涙を浮かべていた。周りの女子の期待も、今は俺に集中してしまっている……。

落ち着け、まずは深呼吸だ。次に素数を……かぞえる時間が無いんだった。

投げやり成分をたくさん含み、立ち上がる。そして振り返ると……
…予想以上にキツイ視線。

しかし、ここで怯んだら負けだ。最初はすべることもなめられることも許されない。ならばこそ、俺は、

「えー、尾和浩一です。どちらかといえばスポーツは苦手ですね。この環境に馴染むにはまだ時間がかかりますが、努力はしたいです。まずは一年間、よろしく願います」

ちよつとだけ長く喋ってやった。
どや！

周りに微妙な空気が漂う中、俺は一人優越感に浸りながら教卓の方へと向き直り、そのまま座席に……

パンツッ！！ ガンッ！！
…叩きつけられた。

「で？挨拶も満足にできんのか、貴様等は」

パンツッ！！

隣で2回目の快音が聞こえる。距離と文脈から考えて犠牲者は織斑だろう。左手で正面からぶつけた鼻を抑えつついきなり叩いてきた人物を見上げる。

黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられていながらけして濃肉厚ではないボディライン。組んだ腕には先ほどの凶器とおぼしき出席簿。

「げえっ！？ 関
パンツッ！！」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかった」

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいは…」

織斑、撃墜。しかも流れるようなスルー。洗練された無駄のない動きに萎縮してしまい、言いたいことを飲み込みながら席についた俺。

チーフとは違う意味で反逆 \parallel 死の方程式が成り立つと仮定して現在
証明中だ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者
に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、理解しろ。出来な
い者には出来るまで指導してやる。逆らってもいいが、私の言うこ
とは聞け。いいな？」

反逆 \parallel 指導される \parallel 死
オーケー、理解し

「「「「「キヤーーーーーー！」「」「」

うおっ!?

「千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！富山から！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

教室に黄色い声援が響き渡る。え？なんで？ぶつちやけ理解しかね
る。なんか「死ねます！」なんて言っている人もいるし。

一方、「お姉様」こと織斑先生は頭に手をおき、かなりうっとおし
そつな顔で生徒を一瞥している。

……織斑？

ふと気になって横の織斑を一瞥する。彼は頭をさすりながら織斑先生へと視線を向けていた。うん、ちゃんと復帰していて安心したよ。俺1人じゃ泣きそう……って違う違う。

「ち、千冬姉……」

パンツッ！！ 3 H I T !

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

ふむ、織斑一夏はマジでこの鬼教師の弟らしい。しかし先生すごいね、肉親だろうと容赦なしとか教師のあるべき姿の一つだろ。ところが、周囲の女子の噛みつきどころはちよつと違うらしい。

「え……？織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、男でISが使えるのもそれが……？」

「え？じゃあ尾和くんってどうして使えるの？」

ざわ… ざわ…

キヤーキヤー言っていた女子の音量が下がる。なんつーか、体力とかメンタルとか色々と不安になってきた。切り替え早すぎだろ。

「夏はどうなんだ？気になって彼の方を見ると…彼は窓辺を見ているようだ、その視線を追って窓辺に顔を向けたところでチャイムが鳴った。」

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

「「「はい！」「」」

長い長いSHR、俺はこの瞬間、暴力と出会った。

パアンツ！

「…失礼なことを考えていたな？」

「いえ、滅相もございません」

暴力との遭遇（後書き）

書かなきゃいけないことがあると思うんだが思い出せない

一夏の人脈（前書き）

半ば無計画発進。とりあえず、週1〜2回の更新をメドに頑張ってみます。

文章が見つづらい、誤字脱字の指摘などは常に受け付けております。

一夏の人脈

「……………」

そつだ。織斑なんて他人行儀な扱いをしてはいけない。なんせ俺には、彼しかいないのだから。そつ気づいた俺は一夏を、一夏は何を思つてか俺を見る。

…ここだけ語ると婦女子の方々のうち一部が発狂するのも知れないが、背景にあるいろんな事を話せばそんな事は無い、と信じている。そもそも俺眉間にニキビが3つもあるし。関係ないね。そもそもどうして見つめ合うことになつたんだっけ？運命の出会いつて男同士でも…

「…浩一、どうする?」

小声で話しかけてくる織む…一夏、同時に中断される現実逃避。ちくしょう、いい感じに逃げ切れると思つていたのに。仕方ないが5W1Hを用いて現実と向き合つとしよう。

When?…一限目終了後の休み時間。

Where?…IS学園1年1組内。

Who(誰が)?…織斑一夏、尾和浩一の2名。

Why?…男だから。

How?…興味を持った女子に遠巻きに囲まれ。

What?…ギブアップした。

……意味不明?想像しろ。ぶっちゃけ俺たちはアライグマの風く

んだ。あれ？レッサーパンダだっけ？…いかん、とりあえず打開策を提示しなければ。

「…よし、ジャン負けが友人第一号を作る方向で」

「…どうしてそうなる？」

「…手っ取り早く片方が救われるから」数秒の間をおいて、首を縦に振る一夏。よしよし、俺が勝てば当面のからかうネタは確保できる。

そして2人は机の影に腕を隠し、無言で息を合わせてジャンケン…ポン。あいこで…しよ。

俺の手はチョキ、対する一夏は　　グー。

なん…だと…

まさかのオチに俺の手が震える。

「　　うおお………」

救われたのは一夏だった、ちくしょう。星占いを信用して損した。まあ言い出しっぺだし、適当に近い奴を……

「……ちよつといいか」

「え？」

視界の外から話しかけられ、俺はそちらに向き直った。そこには黒い長髪をポニーテールにした長身の女子が1人。まさかさつきまでのノリを聞いていたってオチじゃないよね？とにかくかなりチャンスじゃ

「……箒？」

ないかとか考えていたら、一夏が名前だかあだ名だかよくわからないことを口走った。しかも首をわずかに上下させる箒氏。つーことは名前…か？

あれ？自己紹介された人の中にそんな名前あったっけ？
というか呼び捨て……

「廊下でいいか？」

「お、おう」

そんな事を言いながらさつさと教室を出ようとする両名。
い、今放置されたら確実にマズいっ……！

「ちょ…ちょっと待った！」

「…なんだ」

思い切り不機嫌そうな声で応えながら睨んできた。眼力で人間を射抜けるんじゃないか？

「できれば俺もついて行きたい」

「…勝手にしろ」

そう言つてすたすたと廊下に向かう篤氏。語尾に怒りがにじみ出ていたが、感動の再開：もしくは恋人との甘い時間？とにかく知り合いと2人で話す機会をぶち壊されたんだから当然だと思ひ込もう。

「お、おい…」

あわてて篤氏を追いかけて、廊下にでる一夏、その後ろに俺。さらに後方に女性包囲網（全校生徒の半分はいるんじゃないか？）。うむ、これ以上の好転は望めないだろう。軽く憂鬱な気分になる。

「……………」

「……………」

前方の2人は無言。むしろ悪化してるんじゃないか…？
新たな現実逃避策を思案していると、前後両方に動きが見られた。

「あ、そういえば」

「何だ？」

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「……………」

前方…思い出話に懐かしむ2人。

「ごめん、ちょっと…あ、一夏ー！」

後方…一夏の名を親しげに呼ぶ人物1人。

「ちょっと一夏あー！返事しなさいよ！」

「えっ…リン？お前、リンか？」

篤氏との話が途切れたのか、こちらを向いた一夏。そして後方から迫った人物を見て驚いていた。篤の次は林？知り合いの名前が特殊すぎるだろこれ。

「……あんた達、誰よ」

手を振って近付いてきた彼女は、俺と篤氏を一瞥してから不機嫌そうな声で言ってきた。

「貴様こそ何者だ？」

そう言って冷静に応える篤氏。

…おい、なんで修羅場チックな状況に追い込まれたんだ。つか2人とも誰だ。

しかし、どうも頭で考える暇は無さそうだ。2人の間には火花が見える気がするし、一夏は一夏でちよつと戸惑い気味だし…

「どつちもどつちだろうが！そもそも2人とも一夏とどういう仲なんだよ！」

「「なっ……………」」

思わず声を荒げる俺。すると2人とも顔を赤らめた。え、何この反応。

「…なあ一夏、この2人とはどういう接点が？」

「ああ、2人とも俺の幼なじみ。ついでに言えば箒がファースト幼なじみでリンがセカンド幼なじみ…ってとこかな」

「……………」

本当にそうなのか…？噂の2人から睨まれてるし。しかしさっきの反応といい、今の表情といい…惚れてんのかねえ。

「とりあえずさ、一夏。箒さんに…林さんだけ？初対面であだ名やら呼び捨てってーのもあれだし、簡潔に紹介してくれよ」

「ああ、いいぜ。えっとだな、こっちが篠ノ之^{シノノホウキ}箒。小学校からの幼なじみで、俺の通っていた剣術道場の娘だ。小4以来だから…六年ぶりだな。久しぶり、箒」

「……………」

そう言っただけ俺たちを連れ出した方の女性を指す。六年…なるほど、知り合いであっても話が始まらないわけだ。しかし箒って名前…小学校がいじるのに困らないよな。前提条件は全てクリア…ってやつ？

「そしてこっちが鳳^{ファン}鈴音^{リンイン}。箒が小4の最後に引越した後、すぐ

に転校してきてからの付き合いだな。中2の終わりに国に帰ったから、1年ぶりになるな」

「……………」

リンイン…中国人か。しかも読みから考えると鈴音^{ススネ}つてのが正しい表記だろう。林とか思っていた俺が恥ずかしい。

「よろしくね、篝」

「ああ、こちらこそ」

黒い炎を背後に燃え上がらせながら握手する2人。おい、間違っても某次大帝様の使ってたドボルザークなんて持ち込むなよ？マジで動かしかねないし。

黒い炎の原因は満足そうに微笑んでいやがる…。なんて奴だ、狙ってやっていたらマジでえげつないぞ…

「じゃあ最後は浩一だな」

「あ…ん、おっけ。名前は尾和浩一。一夏とは2時間ほど一緒にいた仲だ。知つての通り同性は彼しかいないから、なんだかんだで一緒にいる時間がなくなると思う。まあ…いろいろよろしく」

軽い会釈を交え、簡潔に挨拶しておく。篝と鈴も一時休戦したらしく、こちらを向いてきた。

と、タイミングをはかったかのごとく休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴り、後方で様子を伺っていた女性陣が蜘蛛の子を散らすように解散していった。

「俺たちも戻ろうぜ。あ、鈴は何組になったんだ？」

「2組！あとで遊びに来なさいよ！一夏！」

鈴はそういい残して、一足先に教室へと駆け足で向かっていった。

しかし…何というか、彼の周囲は凄惨。教師に加えて同じクラス、違うクラスの人物にまでコネを持っていたのだから。また、確実にはないが、同級生には一方通行の恋愛感情もセツトらしい。

……なんだろう。無性に泣きたくなってきた。

そんなことを思いながら、俺は1人無人の廊下を歩いていった

…無人？

パンツッ！！

「さっさと席に着け」

…了解です、織斑先生

一夏の人脈（後書き）

鈴「あたしにも出番をよこしなさい！」

はい、鈴が現れました。ぶっちゃんけ転校イベントに浩一の居場所が無かったからです

今回は全編一夏視点にてセシリアと揉めまくる予定。

貴族の挑戦（前書き）

セシリア登場回。全編一夏視点でお送りします。

感想お待ちしております

貴族の挑戦

Side 一夏

お、俺だけか？俺だけなのか。みんなわかるのか？

周りを見渡しても、俺みたいに頭を抱えているような人はいない。浩一を含めて、みんな山田先生の言うことに反応してノートをとっている。

正直に言おう、授業初日の二限目にしてついていけない。教科書だって意味不明の単語の羅列にしか見えない。なにこれ、お経？このアクティブなたらとか広域なたらとか…専門用語だらけじゃないか。これ、まさか全部覚えてないといけないのか…？
気付けば、俺は隣の女子を注視してしまっていた。

「な、なに？」

案の定、視線に気付いた女子が引きつった作り笑いで聞いてきた。

「あ、いや。何でもないんだ。ごめん」

「そ、そう」

俺の言葉を聞いて、彼女は複雑な表情を浮かべてノート記入に戻っ

た。…？ 俺、避けられてる？

「…織斑くん？なにか問題がありました？」

俺と彼女のやりとりを見ていた山田先生が、心配そうな表情でこちらに訊いてきた。

「あ、えつと…」

「わからないところがあればなんでも訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

おお、なんか頼もしい。よし、素直に訊いてみよう。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「内容がほとんど全部わかりません」

「……………」

あれ、おかしいな。山田先生の顔がおもいきり引きつった。

「え、えつと……。全部、ですか……。えー、その、織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどのくらいいますか？」

「」「」……………「」「」

みんな素直じゃないなあ、最初からつまづいたまま進んでもあとから後悔するだけなのに。いいのか、良いはずがないだろ、みんな！

「…織斑、入学前の参考書は読んだか？」

教室の端で控えていた千冬姉が訊いてくる。よし、素直に答えよう。

「古い電話帳と間違えて捨てま

パンツッ！！

「馬鹿者が。再発行してやるから一週間以内に覚えろ、いいな」

「え、でもさすがにそれは…」

「い・い・な」

「…はい」

素直に答えたら寿命が縮まった。どういうことだろう。

「…その暇人、貴様もだ」

パアンツ！！

あ、浩一も叩かれた。その拍子に手元から単語帳らしきものが落ちてくる。ちょうど見えた文字は……………

『アクティブ』

……………見なかったことにしよう。

「ちょっとよろしくって？」

「へ？」「ん？」

二限が終わった次の休み時間、鈴のところに向かうか迷っていた俺は、いきなり声をかけられて素っ頓狂な声を出した。浩一も浩一で考え事をしていたのか、同じような反応をしていた。

話しかけてきた相手は、高貴な感じを前面に押し出している…なんというか、今どきの女子を代表しているようなイメージを受けた。わずかにロールがかかった金髪は非常に鮮やかで、ブルーの瞳がこちらを見下すように見つめている。

……あんまり関わりたくないなあ…

「まあ！2人そろってなんですの、その態度！特にあなた、その目が気に入りませんわ！」

そんなことを言いつつ、俺へ指を突きつけてくる。目なんてどうしようも無いとつつこんでやりたかったが、面倒なことになりそうだし謝っておこう。

「あ、ああ。すまん」

「誠意が全く感じられませんわ！その反抗的な目つきも一切変わって無いではありませんか！わたくしに話しかけられるだけでも光栄だというのに、どうしてそのような態度をとれるのかしら？」

ダンッ！！机をおもいきり叩き、突きつけた指をさらに近付けてきた。そうか、苦手だったのが顔に出ていたんだな。今後気をつけな

いと。

「で、あなたの用件はなんですか？キレキャラが校内にいることはわかりましたので」

と、そこに浩一が会話に加わってくる。しかし何故に敬語？しかもかなり辛辣だし…

「キレキャラ…ですつてえ！？このセシリア・オリコットを、イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしに、そのような扱いをするなど、許せませんわ！」

ふむ、セシリアさんか。ふーん。それにイギリスの代表候補生…代表候補生って、何？

「あ、質問いいか？」

「ふん…下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

ガタタツ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっこけた。え？なんで？思ったことをしゃべっただけじゃないか

「あ、あ、あ…」

「『あ』？」

「あなたたちっ、わたくしを愚弄してますの!？」

すごい剣幕だった。目が見開いて凄まじいことになっている。

「いや、そんなことはないぞ？」

「いえ、そのような考えはありません」

浩一と声が被る。普通にわからなかっただけなのに、何でこんな返事が返ってくるのだろう。親切にわからないところを教えてくれるのは教師だけなのか？その教師には一週間で電話帳の丸暗記を命じられたけど。

「…信じられない、信じられませんか。極東の島国には常識というものが無いというの…?」

頭に手を当て、本当に残念そうな表情でこちらを見てくる。というより、いい加減代表候補生とは何か教えてほしい。

「大体、男で初めてISを動かした方々と聞いて、少しくらい知的さを感じさせると思っていましたのに…あまりにも無知で期待はず

れでしたわ」

「俺に何かを期待されても困るんだが…」

「ふん。まあでも？私は優秀ですから、あなた方のようなマナーの悪い方々にも優しくしてあげますわよ。ISのことで何かわからないことがあれば…今までの無礼を詫びれば教えて差し上げてもらってよ。何せわたくし、入試で”唯一”教官を倒したエリート中のエリートですから」

「……………それはすごいですね」

彼女の相手をするのが面倒になったのが、浩一は完全に無視を決め込んだようだ。しかし入試っぽくて教官が絡むやつって…あ。

「入試ってあのIS動かして戦うやつ？」

「…それ以外になにがありますの？」

「それだったら俺も倒したぞ？教官」

「は…：？」

今の発言が信じられないのか、セシリアは目を驚きに見開いている。さらに、聞き耳を立てていた女子が騒ぎ始めた。

「嘘…あの教官を!？」

「スゴイ!これって特ダネじゃない!」

「一夏くん、やる!っ!」

「教官を倒したのはわたくし1人だとうかがいましたが…?」

「女子の中では…ってことだと思いますよ?主席殿」

「な…!」

周囲が騒ぎ立てる中、セシリアは1人肩を震わせていた。

「あなた!あなたはどくなって

と、彼女の話を守るようにチャイムがなり、セシリアは言いかけた言葉を飲み込んだ。

「っ…! また後で来ますわ!」

一方的に宣言して、自分の座席に戻っていった。そうだな、今のうちに訊いておこう。

「なあ、浩一。筈たちの時と随分態度が違わなかったか?」

「いや、気に入らない人が相手だついで、ね」

そう言つて浩一はやや照れくさそうに笑つていた。なるほど、お前もああいうのは苦手なタイプなんだな。1つ勉強になった。などと考へているうちに、千冬姉が教室に入つてきた。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

先程までと違い、千冬姉が教壇に立つている。

「ああ、その前にクラス代表を決めないとな」

ノートの準備を終え、書き取りを始めようとしたところで、ふと思ひ出したように千冬姉が言う。うん？代表？

「クラス代表とはそのままの意味だ。今月末に行われるクラス対抗戦の他、生徒会の開く会議や委員会への出席を行つてもらふ。自薦他薦は問わないが、1度決定すると1年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。委員会とかに出るって事は、つまりはクラス長……ってことで良いんだよな？まあ面倒が多いんだろ、な

るやつは「苦勞さまだな。」

「はいつ。尾和くんを推薦します！」

おお、これはラッキーだ。このままアイツが認めてくれればそれで…

「じゃあ私は織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

「お、俺！？」

なんでこっちに振るの！？つい立ち上がってしまう。何このノリで選んだ秀困気、このままいくのは非常にマズいぞ…

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら多数決で決定するぞ」

「ちよ、ちよつと待った！俺はそんなのやらな

「拒否権などあるものか。選ばれた以上、覚悟しろ。尾和もいいな？」

拒否権が無いとか強引すぎます、お姉さま。とりあえず言われた通

り席につく。

「あー、わかりました。ついでにイギリスの代表候補生様を推薦してもよろしいでしょうか？」

「オルコットだな？ああ、構わんぞ」

浩一が千冬姉の方を見ながら推薦する。えー、さっきのセシリアさんだっけ？なるほど、拒否権が無いなら票を割ればいいんだな。よし、なら俺も…

「じ、じゃあ俺も筭を……」

ギロツ！！

「なんだ、織斑。まだ何かあるのか？」

「イエ、ナンデモナイデス」

視線が物理的に干渉出来ていたら俺は確実に死んでいた。筭さんマジパネエっす

「さて、もう意見は無いな？無いなら多数決をとるぞ。」

「待ってください！納得がいきませんわ！」

パンツと机を叩いてセシリアさんが立ち上がった。おお、よかった。この流れをどうにかしてくれ。

「多数決などという選出は認められません！少し投げやりではありませんの！？ … 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！いいですか！？ 実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような「票をとる自信ないのかよ…」

凄まじい勢いで不満をさらけ出すセシリアさん。浩一のぼやきも聞こえなかったようだ。しかし、よくもまあ舌を噛まないものだ。その流暢な日本語も代表候補生の成せる技なのか？

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で

…カチン。

「イギリスだって大してお国自慢無いだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……!!」

あ……まずい、言い過ぎた。セシリアは肩をわなわなと震わせ、教室の空気も張りつめている。うわあ……やってしまった……

「……四の五の言うより、戦ってみればいいんじゃないですか？お二方。自分の実力を示して、勝った方が代表ってことでわかりやすいじゃないですか」

そんな俺たちをまるで他人事のように扱う浩一。

「まあ確かに。俺はいいぜ」

「わたくしもよろしくてよ。2人まとめて相手して差し上げますわ！」

おお、全員の利害が一致した。だがしかし、当の浩一は呆気にとられた顔でセシリアを見ている

「……俺、戦わなきゃだめ？」

「当然ですわ！どうしてあなたが参加しないのですか！」

「いや、実力的には格下だし、別にいつかなーなんて……」

バアンツ!!

千冬姉の出席簿が火をふいた。多分今日中で最高の火力だろう。

「拒否権は無いといった。意見を出した以上、貴様を含め3人が納得する形でまとまるまで責任を持って。いいな」

「…はい、わかりました」

うなだれ、頭をさすりつつ浩一は頷いた。

さて、2人まとめて相手すると言っていたが、さすがにそれはセシリアに不利だろう。

「ハンデはどうする?」

「あら、早速お願いかしら?」

「いや、2対1だろう?だから俺たちがどのくらいハンデつけたら

「…あなた、本気ですか?素人が2人だけでわたくしに勝てる見込みがあるんです?」

冷たい声で、そう言い放たれた。周りにも苦笑している奴がちらほらといる。

「織斑くん、それはナメすぎだよ」

「そうだよ、痛い目見るって」

…苦笑を通り越して呆れている人までいるみたいだ。しかし、先程から何度も実力を過小評価しているようにとられているが、どうすりゃいいんだろ？

「…なら、ハンデは無しでいい。」

「あら、わたくしが手加減する必要はありませんの？」

「いや、それも必要ない」

「あー、その、1つだけ変更したい点があるんですが…」

浩一が手を小さく挙げながら話に加わってきた。

「ふふん、よろしくてよ。きいて差し上げましょう！」

「…2人を同時に相手にするのではなく、連戦でお願いしたいです」

「ええ、かまいませんわ。あっさりと終わるのも楽しくないですしね」

そういつて口元に手を当ててしたり顔でこちらを見てくる。なんかこう…「ホーツホツホツホ」みたいな高笑いが出合いそうな感じだ。…クラス代表とかは正直嫌だけど、彼女に言いたい放題言われっぱなしも嫌だしな。代表候補生がどんなもんか知らないが、負けられない…！

「話はまとまったな？では一週間後、織斑と尾和はセシリアと戦ってもらおう。場所は追って連絡する。では授業に戻るぞ」

この間、わずか10分。人の運命なんて簡単に決まるもんなんだな。妙に納得して授業に戻る。

…早速わかんねえ……

先行きが不安すぎる……

貴族の挑戦（後書き）

連戦の順番が決まっていけないのは仕様

初日の騒動はまだ続くようです
感想お待ちしております

その同居人の名は（前書き）

さて、一週間ぶりの更新。

ストック切れとテストで氏にたいです

その同居人の名は

Side 浩一

「はあ…面倒だ…」

現状：来週が鬱すぎて生きるのが辛い。一夏と代表候補生様との戦いに半ば巻き込まれる形で参加させられたり、内職が出来ないことが判明したり、電話帳丸暗記を指示されたり…

昼休み、鈴さんに捕まった一夏は今ここにはいない。なんでも、代表候補生というもののすごさを教えてもらうらしいが…明日の篤さんが怖そうだ。

そんな事を考えながら、机に突っ伏してぼーっとしてみる。この学園は全寮制なのだが、女子用の設備しかなかったため、それを整える関係で一週間は自宅…俺の場合は近くの宿から登校しなければいけない。しかし、この視線の集中砲火が辛くて動くこと自体ダルい。あー、女子の客足途絶えないかな…

「あ、尾和くん。ここにいたんですね」

誰？聞き覚えのある声を聞いて体を起こすと、目の前には山田先生。なんか資料らしきものを抱えているが、その体制のせいで胸が強調され…いかにいかに。

「どうしました？」

「いえ、寮の部屋が決まったので知らせにきました」

おいおい、初耳だぞ。手違いじゃないのか？

「あれ、部屋の調整などがあるから、一週間は自宅登校と聞きましたけど？」

「そうなんですけど、事情が事情なので……政府絡みですし」

最後の方は小さい声で、俺の耳元で囁くように付け加えた。確か、俺ってどの国の所属が決まっていけないんだよね。多分一夏も同じだろう。だからこそ、いろんなところから勧誘が来るらしい。しかし軍属はイヤだし、遣伝子解析もチーフにやってもらった以上、どこの勧誘も大した意義がない。それらが止むとなれば断る理由は少ない。荷物も宿泊先だったビジネスホテルから持ってきてくれるだろう。

「大体わかりました。ちなみに同居人は一夏ですよね？」

「いえ、当初はその予定でしたが、寮に入って早々に揉めた生徒がいて、その2人の抱き合わせは避けたいということや、急ぎの部屋割りだったことが重なって……」

おい待て、どついつことだ。問題児と同室とか悪化すること請け合
いだろ。

…夜、休めるのかなあ……………

「……だよな？」

受け取った荷物を持って目的の部屋へ向かう。その間にルームメイ
トとの接触方法をいくつか考えてみたが、正直良い案が思いつかな
い。

そもそも、相手の”女子”はこの事実を知っているのか？知ってい
るならともかく、何にも知らないままなら警戒心しか抱かない気が…
…いやまで、それ以前に相手はトラブルの前科持ちだ。
考えがここまで至り、急に気が重くなる。よろしい、こうなれば腹
をくくろう。

「1048…」

番号的には大丈夫だ。後は中の人に警戒させない方法その1で…っ！

コンコン

「すみませーん、どなたかいらっしやいますか？」

警戒させない方法その1、策をとらない。うん、無難だよね。

ガタガタ…

ドアの向こうで物音が聞こえる。片付けでもしているのだろうか？

「……………」

6、7分ほどして、物音が止んだ。さあ、同居人との御対面という。

ガチャツ……………ボタン！

……………おかしいな、今ドアが開いた気がするんだが。聞き違い、だよな？相手の準備がまだなんだよね？

とりあえずさらに3分間待つてやろう。さあ、顔を出せ！

コンコン

…3分も待つてられるか。1分以上フライングして再度ノックして

みる。しかし返事はない。どういうことなの…？
仕方ない。次の手段だ。カバンから教科書を取り出し、丸めて筒状にする。その端の端の片方を口に、もう一方をドアにあて、会話を試みる。

「えー、すみません。同室に割り当てられた者ですが」

素早く口にあてていた方の端に耳をつけ、相手の反応を伺う。…え？なんて言った？聞こえないんですけどー。
しかし聞き耳を立てっぱなしもマズいと思い、一度ドアから離れる。

ガチャッ…

おお、今度こそドアが開いたぞ。その隙間からは、水色の髪を持つメガネをかけた人が顔をのぞかせていた。身長は…鈴さんと同じくらいだろうか。

「えー、その、これを見てほしい。」

ポケットに折り畳んでつつこんでいた資料を取り出し、開いて中身を確認した上でドアの隙間に先端を入れる。それを引っ張られる感覚を感じて手を離すと、自然と彼女の元へ吸い込まれた。同時に、ドアが再び閉まる。

書類に目を通してもらっている間、再び暇になった。さて、これに入れてもらえ

ズドンッ！！

る？

突如響いた大きな音に、思考が中断される。はて、これはいつたいどうしたことだろう。

ズドンッ！！

2 発目。こんな音のする物を寮に持ち込むとは、周囲への配慮がなっていないなあ。音のした方向に目を向けると、廊下の少し離れたところに人がたまっている。昼休み風にモーゼ現象、人が自然に道をあけること。命名俺が起きれば簡単に様子を伺えるのだが、正直心が保つか心配だ。

野次馬女子に事態の収集をしてほしいと願った矢先に、ようやくドアが開く。

「……今のは？」

「すまん、わからない。それより、部屋に入って良いか？」

一瞬の間をおいて、相手は頷いてくれた。今は何よりも先に、精神的に休みたかった。

入ってすぐ、荷物を近くにどけてから、荷物のない手前のベッドに倒れ込む。なにこれ、むっちゃ柔らかくね？できればこのまま潜りっぱなしがいい。

そのまま仰向けになって部屋を観察する。ディスプレイ付きの机が2つ、その奥には本棚がある。入り口側を向くと、大型ディスプレイが目に入った。その端には収納用のクローゼットが1つ。振り返って窓側を見れば、窓の横に観賞用植物がおいてあり、高級感を漂わせる。

「……奥に行つて」

と、机の近くにいた同居人にツッコミを入れられる。

「あ、はい。でもそっちの荷物は？」

「…今から、持つて行く」

そう言いながら窓際にあったカバンを持ち上げる。続いて俺も、持ってきた荷物をまとめて奥のベッドへと移動する。

「あー、初めまして。1組の尾和浩一です」

「…更識、簪。4組」

あーはいはい、成る程。口数が少ないタチか。これで大体わかった。問題児ってわけじゃなくて、近寄りがたいタイプなんだな。これで俺の安眠は守られそうだな。

「えっと…更識さん。これから食事をとって、それからシャワーを浴びようと考えているのですが、そちらは何時にします?」

「…なら、私が先に入る」

「了解…っと」

話がまとまったので、俺は立ち上がる。荷物は…あとで整理すりゃいいか。俺は部屋をあとにした。

さて、一夏の方はどうしたのだろう。俺の方はある意味安泰だったので、余計に一夏が気になる。つと、そういえばさっきの騒ぎはいつたいなんだっただろう。

「あ、ちょっといいですか?」

「えっ? ああ、尾和くん?」

近くにいた2人組の女子に話しかけたら、やや驚いた様子で返して

きた。相手は俺を知っている様子だが、俺には記憶がない。

「あー、えーっと、確か…」

「あれ？もしかして覚えてない？」

「えー、ひどーい！同じクラスなのに！」

もう片方の女子共々批判してくる。…すみません。どちら様も記憶にございません。

「…「ごめんなさい」

素直に謝っておく。おそらく最善の手だよな？ところが相手は揃って笑い出した。

「あははっ、ジョークだよジョーク。ごめんね？」

「私はマノリユー・リアーデ。で、こっちがユッキーこと田島有紀。よろしくー！」

「…マジでびびったじゃないですかあ…」

やや大きさにげんなりしてみせると、2人揃ってクスクスと笑い出

した。何このシンクロ。分類F？いや、あれは兄弟か。

「で、どうしたの？」

「いや、一夏の居場所を知らないかなーって…」

「あー、惜しかったねえ。ついさっきまで篠ノ之さんと修羅場ってたんだけど…」

えー、なんだそれ。あの異常な音と関連しているのだろうか。

「…その最中、もの凄い音がしなかった？」

「う、うん。なんかドアを木刀で貫いたみたいで…」

「いやー、織斑くんも大胆だよねー」

「初日から無謀ですよねー」

A H A H A H A H A … 3人そろって笑い声をあげる。

篠ノ之さんには逆らわないようにしよう。木刀で木製のドアを貫くとかどうなってるの…

「で、さっきようやく静かになったから、多分部屋かなー。102
5室だよね？マノ」

「うん、そうだよ」

「そうですか…。ありがとうございます」

「うん、また何かあったら声をかけてね！」

「またねー」

「では、失礼しました」

挨拶を交わし、2人と別れる。今は一夏のところに行く必要は無いだろう。というか怖くて行けない。

…学食に行くか。

さて、学食にて。

右も左も好機の視線にさらされ、落ち着いて食事もとれない現実を突きつけられる。つーか後ろ、いつの間にか行列っぽくなってね？とりあえず券売機で日替わりセットを購入、適当に席を…お、鈴さんを発見。一夏のことを聞く良い機会だな。

「すみません、隣に座ってもよろしいでしょうか？」

「えーっと、浩一だけ？別にいいよ」

許しをいただき、近くに腰掛ける。手を合わせて食前に一礼をして

から今日の日替わりセット 焼き魚定食 に手を着ける。

「そういえば、一夏から訊いたけどさ。あんたはどうなの？」

「ん？何を？」

「来週の試合」

ああ、あの死亡フラグ。それよりも明後日くらいに衰弱死してないか不安なんだが。

「んー、やっぱり代表候補生って強いんですか？」

「うん。私もそうだけど、かなり強いよ」

そうなのかー…

「…代表候補生？中国の？」

「うん、そうだけど？」

嘘、だろ…？イギリスの方と全然違うじゃないか。意外すぎて、思わず魚の身を落としそうになる。

「…なんで黙ってるのよ」

「いや、あの人と良い意味で違いすぎて…」

「ふーん」

弁解したら興味なさげに返された。ヤバい、間が持たない。とりあえず魚を食べて…

「痛っ…」

骨が口の中に食い込んだ。急いで手で取り出して舌で様子を探る。とりあえず出血はないようだ。

「…大丈夫？」

気がつくのと、鈴さんが俺の顔をのぞき込んでいた。

「大丈夫です。お気遣いありがとうございます」

「…さっきから気になってたけど、その敬語モードキ止めてくれる？」

「んー、わかった」

のぞき込む体制を元に戻していた彼女に指摘され、敬語を止める。自己紹介したときもタメ口で言ったし、抵抗はない。つーかこれ怠いし。

「それと、あたしの事は鈴でいいわよ。一夏と違って知り合いないでしょ？」

まったくもってその通りです、ハイ。何この人、天使？

「…褒めても何もでないから」

そんなことを言いながら豪快にラーメンのスープを啜る鈴。声に出していたみたいだな、気をつけよう。

「っと、ごちそうさま。一夏共々頑張りなさいよ！」

そついい残し、食器を片付けに席を立った。俺は味噌汁を啜りながらそれを見送る。

あ、一夏のこととか色々聞きそびれた。…まあ、いいか。いきなり話す話題でもないだろうし

「じちそうさま」

残った物を胃に収め、食器を片付けに行く。

さて、休憩はこれで終わりだ。後は電話帳とにらめっこして寝よう。
あくびを1つして、部屋へと向かった…

ちなみに部屋にはベッドと中でもぞもぞしている同居人。不便が無い限り不干渉で貰けそうだ。

明日から一週間、どうすっかなあ…

その同居人の名は（後書き）

敬語の下りが強引でしたが、接触完了。

次回は戦闘への準備期間を描く予定です。

誤字脱字、指摘などありましたらお待ちしております

勝利への方程式（前書き）

レッツ自己満足

お気に入り登録5件でテンションが上昇しました。駄文に付き合ってくださいありがとうございます。

勝利への方程式

「さて、一夏は来週に備えてどうするんだ？」

「俺は…鈴にでも教えてもらうかな」

男子トイレ。そこは俺たちの楽園である。うむ、やはり文面が異常なので補足が必要だな。別に掘り合ったりしないし。朝食を終え、俺たちは校舎に向かう前にここに逃げてきた。何故か今日から多数の人間が質問してきて、途切れる気配が無かったからだ。磨りガラスの向こうには人影が動いており、決して安心できないのだが…こちらの方がまだマシな方だ。

「そっか、それなら勝てるかもな。是非とも頑張ってくれ」

「いや、浩一だって備えるんだろ？」

「ISがあれば、な」

朝早く起きた俺は、一度ISを動かそうとアリーナに向かったが、入口がしっかりと閉まっていた。その際近くの教員に訪ねたところ、いくつかの書類を書いた上でおおよそ一週間待つ必要があると言われた。つまり、量産機での訓練は絶望的である。そして俺の専用機…チーフのいる柏木技研から届くデータ収集用の機体は、決戦時に到着予定。ISを使わないで操縦技術の向上なんてどうやるんだよ。つーわけで俺自身はなんもやる気無し、大人しく授業の把握に努め

るのが最優先だと思っている。

「？練習機なら予約できたぞ。昨日申請したら、日曜日には1機使えるってさ」

「…マジっすか」

まさか昨日のうちにそこまで用意していたとは、全くもって予想外でした。織斑一夏恐るべし。

「ああ、だから今は基礎知識を頭に入れて、前日と本番でモノにするつもりだ。一緒に頑張ろうな」

「あ、ああ…」

…俺だけおいていかれるのも癪だし、何より俺が一夏の次にセシリア氏と戦う場合に、勝てる程度に努力する必要がある。しかし鈴は一夏にベツタリだろうし、頼れる人がいない。同世代の代表候補生様が他にいれば、その御仁に教えを乞いたいところだが…そんな都合の良い女性なんてそう簡単に見つかるわけないだろう。よって保留。

そうすると…えーと、うーん…

…ぶつつけ本番で頑張るとか？

と、ここで予鈴が鳴り、ドア向こうの人影が動き出した。俺も思考を中断する。

「っと、ヤバいな。お先！」

「あ、待てよ！」

手早く手を洗い、外にでる俺たち。待ち伏せていた女子を避けながら教室へと向かった。

時間は過ぎて昼食時。俺はまだ教室にいた。

「なあ筈、一緒に飯食おうぜ」

「……………」

一夏は筈氏に無視されている。まさか一晩で過ちを…!？

「あ、織斑くん発見！」

「尾和くんもいるわよ!」

げ…マズい、好奇心旺盛な女子に見つかった。昨日の観察もあれはあれでキツかったが、質問責めはもつとキツイ。三時間ほど前に得た教訓だ。

「…一夏、悪いが先に食堂に行ってくる」

「え、ちょ、待っ

答えは聞いてない！俺は飯のため、食堂へ猛ダツシユ。午後を乗り切る活力を補給しないと、放課後で死ぬかもしれない、冗談とかではなく、本気で。

「あ、尾和くん！」

食堂の近くにたどり着くと、前方から俺を呼ぶ声。顔を上げると、そこには田島さんとマノリユーさんがいた。

「あはは、尾和くん人気だねー」

「朝からお疲れー」

「あー、どうも」

まずは一礼、次にちよつとした考え事。∴彼女たちの知り合いに上級生や代表候補生がいたら、ISでの戦闘について何か教えてもらえるのではないか？そしたら俺もそこそこ戦えるようになるかもしれない。よし、考え事終わり。

「えと、食事はまだだつたりする？」

「うん、まだだけど？」

「まだ知り合い少ないしさ、一緒に食べていいかな？」

そう訪ねると、二人は顔を見合わせた。さあ、返事はいかに？

「んー、いいよ。せっかくだしいろいろ訊きたいもん」

「今友達に食券を確保してもらってるから、追加で頼んでくるよ。なにが良い？」

「じゃあ日替わりで。はい、お金」

見知らぬ人の質問責めよりずっとましだ。俺は条件をのむことにした。

「「「「「いただきまーす」「」「」」」」」

田島さんたちの友達2人を加え、計5人で昼食をとる。
俺は軽めにたぬきそばを選択、冷ましながら麺をすすする。

「ああっ、隣をとられた！」

「大丈夫よ、まだ2日目だし！」

周りから女子の声多数。何やら騒がしいな…
カチツ、\テラーノ

「ハーハーハーハーハー…」

「えっ、どうしたの？」

「あー、いや、ごめん。思い出し笑い」

「そ、そう…」

つい口に出してしまった。お父様の影響力ってすごいね。簡単に人を若干引き気味に追いやったよ。

「それよりさー、尾和くんは大丈夫？勉強」

「ん？ああ、正直不安なんだよなー……」

今はそんなこと無いけどな。ISの工学的特性は平均以上だと自負出来る。PICとかハイパーセンサーの機能一覧とか。法関係？そんなの関係ねえ（キリッ

但し、実技となると話は変わる。スポーツみたいな反復練習は必須だし、そもそも肉体労働は俺の専門外だ。大人しくパソコンを動かすなりアニメを見るなり、ISを使うにしても着脱を繰り返しながらいろいろ調整している方が性にあっている。

っわけで、実技が中心になる二学期以降はマジで不安だ。

「えー…じゃあさ、良かったら教えてあげよっか？」

「本当？ぜひお願いします」

そう言っ頭を下げると、五人そろって頷いた。寮に入ってからだそんな経ってない筈なのにこのシンクロ率、お腹で歌っていたりするのだろうか。

(^ ^) ……

「あー、そっだ。早速一つ良いですか？」

「うん、何でも訊いて？」

何でもとか言うなよ。一瞬スリーサイズを訊きそうになったじゃないか。あーでも人によってはガチで答え…ないな、ありえん。

「同級生にイギリスの彼女以外の代表候補生っていますか？」

とりあえずダメ元で訊いてみる。まあ鈴だけだよな。

「えーっと…セシリアさん以外だと、二組の鳳さんと…」

「四組にもいたよね？」

「あー、いたいた。なんて名前だっけ…」

ほう、マジでいるとは思わなかった。確か…ルームメイトの更織さんが四組だって言ってたような。よし、寮に戻ったら訊こう。

「あ、思い出した！更織って子だよ！」

同じ名字が2人か。面倒そうだなオイ。

「あの生徒会長の妹だよな？」

「千冬様もいいけど楯無様も美しいよね!！」

しかも姉が生徒会長。名前聞き間違えた時とか気まずそうだな。

「更織…下の名前は？」

「確か、かん、かん…」

「あ、簪よ!簪!」

え、ちよ、待てよ。更織簪？

「はあっ!？」

バンツ!!

「え、えつと…」

気付いたら身を乗り出して手を机に付けていた。見れば目の前の女の子がちよつと怯えている。

「あ…ごめん」

「だ、大丈夫大丈夫、気にしないで」

そうは言うものの、表情はひきつりっぱなし。今は確実にまずか
つたな…

興奮しても襲わない、これ大事。

「…申し訳ない」

ほとんど自己満足のためにもう一度告げる。

「でもさー、なんでそんな驚いたの？」

「まさか知り合い？」

周りの友人たちが話題を変えてくれた、ありがとございます。マ
ジで。

「…ルームメイトです」

「」「！」「」

その時、彼女らに電撃走る。これは盛ってないぞ、多分。

「そうなんだ…」

「よりもよって…」

「まさか会長を使って…!?!」

名前を知らない三人がそれぞれ複雑な表情を浮かべていらっしやる。もしや地雷を踏んでしまったのか…?つかピンチ継続かよ、まったくもって引きが悪い。

それと、一番最後の節は否定しよう。あのこちらを思いやらない待ち時間やベッドにくるまって交流を避ける態度など、むしろ嫌われてる気がする。

「えー…そのー」

「ああ、ごめん。えっと…他にいたっけ、マノ?」

「3組はいなかったし…これで全員かなあ」

つまりセシリア氏、鈴、更織さん。素人の俺を加えた4人が専用機持ちか。なんか俺だけ浮いてるな…

「そうですか、ありがとうございます」

「うっん、どういたしまして」

そう言つて微笑んでくれるマノリユーさん。

… 5人とも少しくらい役得があつた方がいいよな。

「他にあるー？」

「あ、はい。寮に帰ってからISに関わらないことつて何かやりますか？」

残つた昼休み中、俺は5人と他愛ない話をしてみた。

帰つたら更織さんに話を訊いてみる。出来ればISでの機動を教えてもらおう。よし、俺の準備はなんとかかなりそうだ。

さて、一夏は篤氏とどうなつたんだろう？

「来たわね、浩一、一夏」

「遅いぞ」

「悪い、2人とも」

「とりあえず俺を拉致つた理由を教えてください、マジで」

現状：拉致られた。

放課後、トイレに行った後すぐに、一夏に剣道場裏に連れて行かれ

た。ちょっとこっちいとしか言われてません、どっこっちですよか？

「浩一はさ、あたしとこれ、どっちに教わるのが正しいかわかるわよね」

「これとはなんだ、これとは！」

「あー、じつめーん」

「貴様あ……」

展開が早すぎる……！いきなり一人怒ってるし。えーと、教わるってことは、つまり……

「あー、つまり一夏の教師はどっちが務めるかって話？」

「っ……ああ、そうだ」

「あんだ、意外と頭の回転早いのね」

意外とは失敬な。1日でバカ扱いされたくないぞ。ま、いつか。一夏と篤氏もそれなりに話すようになったみたいだし。

「それで、一夏本人的にはどっちよ？」

「当然私だろ？一夏」

「はあ？昨日頼まれたのはあたし。あたしが教えるのが当然でしょ！」

「いや、俺は…」

「一夏はそう思っていないだろ！だがわたしは直接頼まれたのだから当然わたしだ！」

「あんたは昨日いなかったでしょ！」

「あー、落ち着け2人とも、一夏の発言権を奪うな！」

「」「うるさい！」

恐れ…確かにこれは仲裁してもらわないと決着がつきそうにないな。俺では無理なものも含めてすぐにわかる。

「あー、なら一夏の意見は後にしよう。篤氏はなんで一夏に教えようとしたの？」

「え、それは、その…」

「浩一が行った後、俺が知らない女子に囲まれて…」

篤氏が言いよんだところで、一夏が代わって説明を始めようとした。

「お、おい、一夏……」

出来れば聞かれたくないのか、篤氏が止めに入る。やましい事でもあるのか？

「さすがに事情は話さないとダメだろ？」

「……………」

篤氏が不機嫌そうに黙り込む。

彼女が黙ったことを確認した上で、一夏は事情を語り出した。

「それで、そこで

以下要約。

・一夏、質問責め

篤氏、一夏を食堂に連れてく

一夏、上級生に出会う

上級生、一夏に契約を迫る

篤氏、篠ノ之の名字を武器に退ける

以上。

って流れで、上級生のコーチを断ったから代わりに教えるって訳だ。」

「なるほどなー…」

篠ノ之という名字から予想はしていたが、いざ知り合いが有名人と知るとちよつと怖いな。ただ、彼女と一夏の様子から、あまりその名を好んでないのはわかった。

「だから、ISに関してならあたしの方が詳しいし、色々得だからあたしに任せなさいって言ってるの！」

「私は一夏の幼なじみだ。こいつにとって一番いい戦術を教えてやる！」

「あたしも幼なじみだし」

「ぐっ…」

あーあ、なにこれ。不毛な戦いじゃないか。とは言え、一夏が全部悪いが。

「うーん、よし。ならばわかりやすくこうしよ」

そう言いながら俺はポケットから100円玉を一枚取り出す。

「一夏にコイントスさせよう。どっちが表だとかは2人で決めてくれればいいと思うんだが、どうだろうか」

「俺はいいぜ、どっちに教わってもありがたいし」

「…わたしもそれで構わない」

「ならあたしもそれでいいわ。あたしが表でいい？」

「ああ、では私が裏か」

全員の同意が得られたところで、100円を一夏に渡す。

「さあ、思い切りやってくれ」

「ああ、いくぜー！」

ピイイン……ガシッ！

カアッ、カアッ……

「」「」「」

100円玉をカラスにとられた。えーと、えー…

「不幸だ……」

「あー…、ドンマイ……」

膝をついてOTLな状態の俺の背を、一夏がさすってくれる。ありがとう、一夏…結構嬉しい。

「気を取り直して……」

ピイイーン……パシッ

今度はちゃんと戻ってきた。結果は…裏

「よ…よし！では一夏！わたしと行くぞ！」

「ち…ちよっと！もう一回！」

「いや、鈴、箒に決まったし……」

「またカラスに食われたくないから却下」

「…カラスのせいで持ち合わせが」

「まったくもって使えないわねー」

ぐっ…使えないと言われた。

「…ま、いいわ。それより、あんたは専用機あるんだっけ？」

「え？あー、まあそうだな。でもなんで？」

唐突な話題変更になんか戸惑う。俺、そのことを口に出したっけ？

「いや、一夏が専用機貰えるらしいから、あんたはどうか気になっ
て…金とかはどこから？」

「そっか、俺は柏木技研…知り合いが勤めている企業に色々と便宜
を図ってもらってるから大丈夫だ」

彼女に話したわけではないのか、納得した。それに一夏にも専用機
か…俺、頑張らなくてよくね？

「へえ…ま、頑張りなさい」

「あ、うん。ありがとう」

そう言い残し、鈴は立ち去っていった。わずかに表情が変わった気もしたが、あくまでそんな気がしただけだ。さあ俺も寮に帰ろう。

寮に帰ると更織さんがいた。昨日と違い、キーボードを操作してなにやら作業をしている。

…なんか忙しそうだし、後にした方がいいな。よし自習だ自習。わからないところと教わりたい小技を一旦まとめておこう。

一夏は篤氏にしごかれ、俺は更織さんに…多分教わる。そうして、俺らの準備は始まった…

勝利への方程式（後書き）

テストを挟んだので、多少整合性があやふやかかもしれません。修学旅行があるため、訂正は後日予定。

IS学園日程表（一夏視点）

4 / 0 8（火） ∴ 簿と特訓開始
4 / 1 3（日） ∴ 訓練機貸し出し日
4 / 1 4（月） ∴ クラス代表決定戦
4 / 2 3（水） ∴ クラス代表認証式 + 代表戦ガイダンス
4 / 3 0（水） ∴ クラス代表戦

次回は4 / 1 4、クラス代表決定戦を予定しております。

3人の専用機の披露宴ですね

他の方々との違いが演出しきれぬ気がする…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9033s/>

IS インフィニット・ストラトス ~ 芯と流情 ~

2011年5月28日08時43分発行